

地図を持って観察に行こう 西山フクジュソウ自生地・ポンポン山

日時 2022年3月6日(日)
集合 善峯寺バス停 9時30分
天候 曇り時々雪 気温 4℃
参加者 14名

3月6日頃は、24節気「啓蟄」の末候(3番目)にあたる「蟄虫啓戸」(暖かくなって土の中の虫たちが動き出す)にあたります。しかし、ここでいう虫はハムシやカメムシ、カミキリムシ、ゾウムシなどの昆虫はなく、両生類や爬虫類の漢字には虫へんが目につく。例えば蛙、蜥蜴、蛇、蝮、蝸牛などがあり、これらを指すのではないだろうか。とは言え、昆虫好きにとっては啓蟄ということで淡い期待を持っていたが、この寒さのせい、全く姿を見せてくれなかった。

この日は強い冬型気圧配置のため、強風と雪に見舞われ、とんでもない一日だった。啓蟄とは名ばかりで、一木一草深い眠りから覚める気配は微塵も感じられない山道を黙々と歩き続けた。途中急坂がありロープを頼りに登る所があると聞かされ、覚悟を決めた。

落葉樹は枝を震わせ、身構えていた。殺風景な道中でも、秋につけた果実の痕跡や大量の落ち葉に思いを寄せ、センニンソウかな、ボタンズルかなとか、エノキかな、ケヤキかなとか、ホオノキの巨木に圧倒されながら、わずか4軒の杉谷の集落を通過した。

しばらく行くと少し平坦な所があり、道の両側には背の低いソヨゴとアカマツが続いた。さらに進むと一つ目の急坂に差し掛かり、左には手すりが付けられていて、安心して登ることができた。

ここら辺は春になるとタムシバの花が見られると聞き、その頃に再度訪れてみたいと思った。というのも私が当会の会員になり、初めての花脊の観察会に参加し、様々な木々の名前を教えてもらったが、中でもタムシバが特に印象に残っていたからだ。

昼が近づいてきたので、開けた眺望のいい場所で昼食を取るようになったが、食べ始めると小雪が舞い始め体が冷えてきた。

みんなが食事を終えたのを見計らって、出発した。今日の目的のフクジュソウの自生地はまだまだ先で、アップダウンがあると聞き、テンションが下がった。尾根を歩いていると真向かいに白いテントのようなものが見え、受付の小屋らしいが、向かいの山へ行くには一度谷まで降りて、再び登るといった過酷な行程が待っている。

フクジュソウ(キンポウゲ科フクジュソウ属)
ガンジツソウ(元日草)ともいう。旧暦の正月に黄金色の花が咲くのでめでたい名ができた。落葉樹林の下などに生える多年草

ヤマケイのポケット図鑑より



ミヤコアオイ



ヤブコウジ



フクジュソウ

ようやくテントに到着し、手続きをしてフクジュソウ（福寿草）の自生地に入った。漢字をみると本当にいい名前だ。フクジュソウを見るためならかなりの山道を歩いてでも、この目で見たいという気持ちにさせるほど魅力があるのだ。案内人からは「今日は日差しが乏しいので、花が十分に開いていないかもしれない」とのことだったが、幸運にも晴れ間が広がりパッと開いた花を見ることができた。

帰り道では更に天候が悪くなり、前方の山がみえなくなるほどの吹雪となり、木々の葉の上にはうっすらと雪が積もりだした。最高レベルの防寒対策でも追いつかないほどの寒さだった。

バス停まで行く前にポンポン山へ行くことになった。一度登ったことがあり、山頂から見た高槻や京都の市街地が素晴らしかったという記憶がある。

山頂に到着すると多くの方が、休憩を取っていた。しばらくして、引率者と子供たち10人ほどが登ってきて、記念写真を撮るために、子供たちが一斉にジャンプするよう促していた。ポンポン山の名前の由来が山頂に近づくにつれ、足音がポンポンとひびくことからつけられたそう。というわけで、山頂にたどり着くと、ジャンプしてみて、音がするかどうか試しているのだ。

あとひと月もすれば、この場所ではないが近くでカタクリの花が見られるそう。西山は希少な花が今も大切に守られていることに拍手を送りたい。

文責（弓削俊彬）



フクジュソウ見学路



観察風景



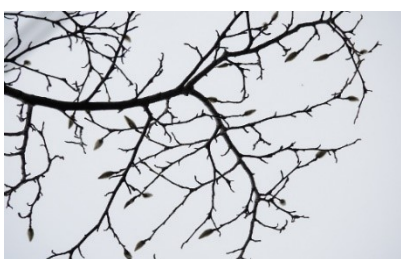
川越え



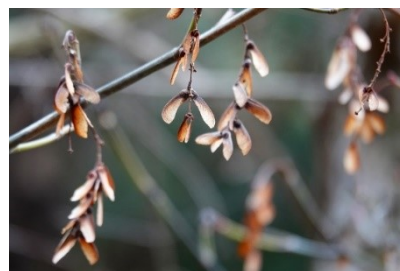
集合写真



ポンポン山山頂



タムシバのツボミ



ウリハダカエデの種子



モミの木に雪つもる